The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞山崎勝昭著『俗地と文人 ： 幕末期大坂の萩原広道』
Author(s)	稲本, 紀佳
Citation	語文. 2019, 112, p. 79-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77207
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

山崎勝昭著『俗地と文人―幕末期大坂の萩原広道―』

稲　本　紀　佳

本書『俗地と文人―幕末期大坂の萩原広道―』は、幕末期に『源氏物語評釈』などを著した文人である萩原広道と、広道が晩年活動した大坂という地との関わりが詳細に論じられたものである。本書の「俗地」という言葉は大坂を示しているが、広道自身も書簡の中で「文雅に理解を示すことの少ない」土地、という意味で大坂に対して「俗地」という言葉を使用しており、同じ意味で「不文之地」とも表現している。

本書の構成は次の通りである。なお、細目は省略した。

はじめに／凡例
第一部　「俗地」の大坂
　一、三都の中の大坂
　二、仮寓の地の大坂
　三、ネットを繋ぐ者たち
第二部　仮寓武士役人の町
　一、仮寓の武士役人たち
　二、仮寓武士役人と大坂の塾
　三、大坂代官竹垣直道と京摂の文人
　四、有功・翁満論争と竹垣直道
第三部　仮寓文人の町
　一、「書肆の町」大坂
　二、大坂仮寓文人たちとその著作
　三、野之口隆正のこと
第四部　文人萩原広道と大坂
　一、岡山の萩原広道
　二、大坂書肆と萩原広道
　三、広道の著作活動
　四、俗地の文人萩原広道
あとがき／人名索引

著者である山崎勝昭氏は、以前に『萩原広道』上・下（ユニウス、二〇一六年）を上梓されており、同書では、萩原広道の伝記的研究が一〇〇〇頁以上を費やして実証的になされている。また、広道の周辺人物についても多数の史料に基づいて幅広く述べられており、幕末期の文化人の交流の実態を知ることができる。萩原広道研究のみならず、幕末文人研究全体にとって大きな意義のある良著と言える。

一方、本書は、大坂という文人が居つかない俗地と、その俗地で長い年月を過ごし、結果的に大坂で没することとなった文人・萩原広道の関わり、というテーマのもとでまとめられており、『萩原広道』と同様、荻原広道だけでなく、同時代に大坂に仮寓していた武士、文人の活動や、彼らの交流の様子についても言及され

ている。

第一部〜第三部は、俗地・大坂の実態について、江戸、京、大坂それぞれの気質などを比較した同時代史料などをもとに論じられている。文雅に価値を見出さない気質の商人が多いとされ、文人が訪れては去っていく土地であった大坂だが、実際の大坂には商人以外の知識階層、つまり江戸から派遣されて仮寓する武士役人などが多数存在していたという。著者は、俗地であるはずの大坂に、文化と密接にかかわる書肆が多数あり、書籍が多量に版行されていた要因は、知識階層である仮寓武士にあるのではないかと指摘する。

書籍の執筆者としては、武士と同様に大坂に仮寓していた文人たちが挙げられる。荻原広道の師である野之口隆正も大坂に仮寓していた文人であり、在坂中に多数の著作が見られる。また、武士と文人・歌人との交流の様子も多彩な史料から概観されており、大坂の文化の発展に仮寓武士・文人が大きな影響を与えた様子がうかがえる。

第四部では荻原広道の来歴や執筆活動について述べられている。広道は大坂で生計を立てるため、執筆活動の他に板下書きの仕事もしていた。大坂の出版に深く関わった広道と大坂書肆との密接な関係を、出版や金銭を巡る書肆との書簡のやりとりや序文の記述などから窺い知ることができ、非常に興味深い。また、広道以外の文人と大坂書肆との関わりについても大変詳しく述べられており、幕末期の大坂出版史研究にとっても示唆に富む内容となっている。

『俗地と文人』というタイトルが示すように、本書は萩原広道を中心的な研究対象としながらも、同時期大坂で活動していた文化人についても広く扱っている。幕末期大坂に居住した武士と文人、あるいは書肆と文人の関係性、文化交流の様子についても、様々な史料をもとに詳細に述べられている。このことから、武家文化史研究、出版史研究にとっても有益な内容と言え、これらの研究に携わる研究者にとって一読の価値のある、優れた一冊となっている。

（ユニウス、二〇一八年六月、四四〇頁、三、五〇〇円＋税）

（いなもと・のりか　本学大学院博士前期課程修了生）